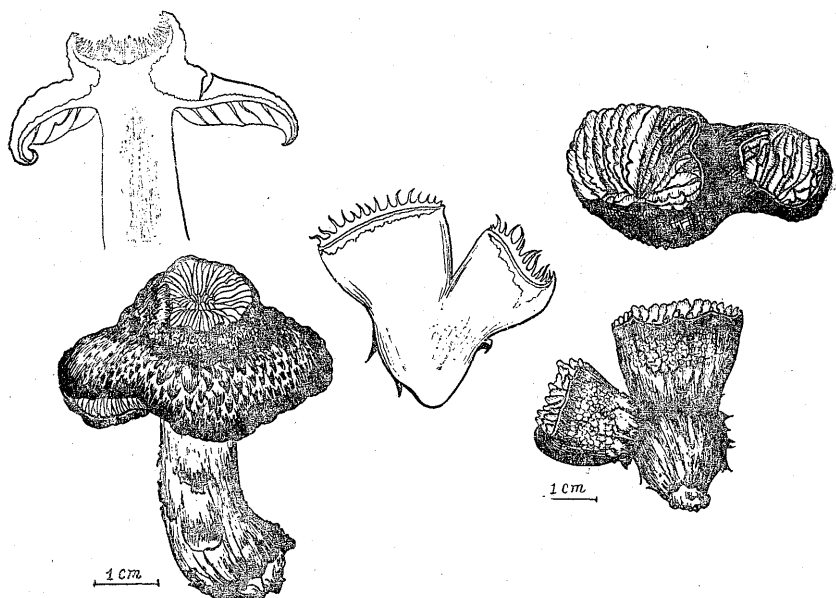


○ シイタケの學名、新分布、畸形など (小林義雄・清水大典)

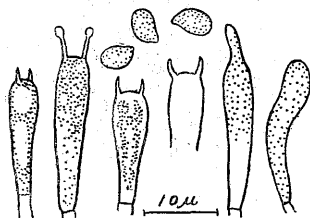
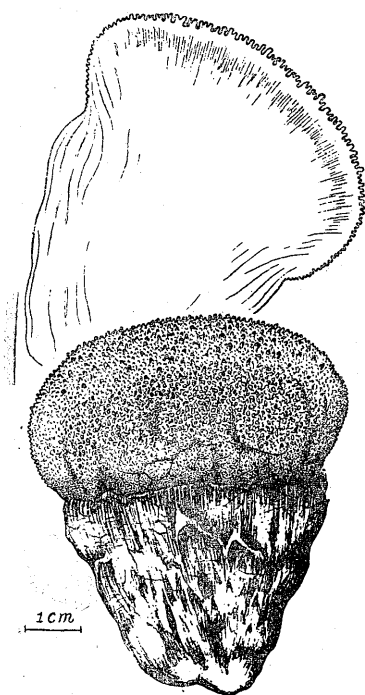
Yosio KOBAYASI & Daisuke SHIMIZU : Nomenclature,
distribution and deformation of "Shiitake"

學名: シイタケは久しい間特殊な屬 *Cortinellus* の一種として、學名は一般には *C. Shiitake* Henn. が用ひられ、伊藤、今井兩氏(1925)は *C. Berkeleyanus* Ito et Imai を主張し、其後命名規約上から澤田氏(1936)は *C. edodes* (Berk.) Sawada を採り、伊藤、今井兩氏(1936)、其他もこれに従っている。處がこの10年來、高等菌類界に獨特のシステムをつくりつつあるシンガーが先年ソビエツトよりアメリカへ移住の途次我國にも立寄り、京大、科博などを訪れ、シイタケの生態や店頭の品などを調査し、自らのシステムに随つてシイタケの所屬に關して意見を發表している (*Mycologia* 33: 447-451 (1941)). それによれば *Cortinellus* 屬は *C. bulbiger* を基本種とする小さな屬となり *Cortinari* 狀の外観と黄色を帯びた孢子群、厚膜の孢子を具えているので、薄膜、橢圓狀圓筒形、無色の孢子を有するシイタケは別屬にしなければならぬというのである。またシイタケは *Tricholoma vaccinum* 型に近い點もあるが、後者は孢子が短く、菌絲が薄膜で嘴狀突起がなく、子實體は地上生である。しかるにシイタケの菌絲は稍厚膜で嘴狀突起があるから本質的に異なる。斯くしてシイタケがはつきりした類縁性 "evident



第1圖 シイタケの畸形。左、脊中合せ狀のシイタケ。右、天上にヒダの出来る花シイタケ。

affinity”を持つ属は *Lentinus* 以外にはないことになるから、茲にその學名を *Lentinus edodes* (Berk. non Schröt.) Singer とするといふのである。シンガーのシステムには我々も大いなる關心を寄せているが、日本にも歐米にも未だこれに全面的に随うという程の學者は居らぬようである。シンガーはシイタケの胞子について圓筒形で $5.8-6.4 \times 2.8-3.3 \mu$ の大いさがあるといふが、小林の調べでは卵形又は長卵形 $6-7 \times 3-4 \mu$ である。菌絲が厚膜で子實體を肉狀革質にし、また嘴狀突起を有することはシンガーの意見通りである。



第2圖 シイタケの畸形——ノウタケ狀の皺シイタケとその擔子基、側絲及び擔子。

分布：我國の北海道，本州，四國，九州等の全域に産し，臺灣では澤田氏（1936）によれば600-1500 米の高地のコバンモチ，カシ類につく。滿洲では内地より持つて行つたものを試験的に栽培しては居たが山中に自生のものは遂いに見當らなかつた。中國本土産も確實な報告あるを聞かない。小笠原島にも自生せぬと思ふ。小林は本年3月末八丈島の三原山原始林中シヒ樹幹に發生するものを採つた。同島に勤務の平野哲夫氏談では戰時中セレベス島マカレー縣ボロカンの1250 米の高處に於てカシ類にシイタケが發生して居るのを發見，徑6-7 釐あり，スープに入れて食したそうである。同氏は植物に明るい人であるからその眞實性は高く評價してもよいと思う。

畸形と特殊な品種：フジシイタケ (*C. edodes* f. *sterilis* Iwade) は栽培中に出來た品種で柄の上部が膨大し傘縁と接し，ヒダが全然退化したものである。

以下記す3 畸形品は何れも昨年3 月より5 月に至る間に秩父，影森村埼玉縣椎茸農協試験場，或はその附近に於て樞のホダ木上に發生したもので，永年に亘る人工栽培の結果であり，その原因はシイタケが4 極性のヘテロトリツクであるという點にあると思ふ。○有合せ狀のシイタケ。一般にキノコの子體の傘面に上向きになつた今一つの小型のキノコが癒着狀をなしているのは稀に見られる。この場合菌柄は殘存し

ているが、ここに示すものは柄らしいものが全然見られない。高さ 5.7 匴傘面は濃暗褐色、癒着傘の部分に細かな皺がある。ヒダは上下とも白色、上部のヒダ中には浅く分歧せる不規則なものが認められる。○天上にヒダの出来る花シタケ。高さ 3.6 匴、不規則な塊状で側面は繊維質、暗紫褐色、上方に裂目がある。上面は截断状をなし偏心状のヒダが発達し、白色である。○ノウタケ形の皺シタケ。ヒダが全然退化變形したもので高さ 6.8 匴、柄は倒圓錐形、繊維質、淡黒褐色である。頭部は半球状に膨れ、全表面に皺がある。その深さは中央部のものが深く、縁邊に至つて次第に浅く點状となる。又中央部の皺中には長い突起があり先端が淡焦褐色を呈し、その他は稍暗黒色である。この皺面の一部には子實層が見られ棍棒状の側絲及び二本の擔子梗を具へた擔子基 ($17 \times 5 \mu$) がある。胞子は不整卵形で $3.7-4 \times 2.5-3 \mu$ である。普通のシタケは擔子梗が 4 本であるのにこの畸形のシタケは數が半減しているのは丁度野生のハラタケに對する栽培マッシュルームの如き關係に似て共通の理由があるように思はれる。

○ 國內有効出版物に關する植物分類學會の申し合せ

Recommendations on future effective publications in Japan,
accepted by the Society of Japanese Plant Taxonomists.

分類學の研究も永い戦時中及び戦後の停止状態から漸く抜け出して昨今相當數の報告が發表されるようになりましたことは御同慶の至ります。かくて新しい名もたくさん現われましたのは當然であります。しかしそれに伴つて一二發表の型式や資格の點などで不完全なものや不用意のものが見當りますことは残念に思います。研究とその發表とは自由でありましていささかも拘束されるものでないことは憲法の認めるところでありお互に尊重するところでありますが同時に國際間の約束に對する信用や義務についてもこれまた尊重すべきこと論をまたないのであります。新しい名の發表に對しまして國際間には學名の混亂を將來もなるべく無くして植物學本來の研究や植物學の應用の面での不利益を少くしたいという國際的な協同精神の立場から、國際植物命名規約が多くの分類學者の意見をもとにして作られ、しかも不備の點はたびたび改訂され、現在では廣く規準と見なされております。従つてこれに規定してあります色々の條件に合わない新しい學名の發表の仕方をしますことは、この規約の運営を妨げる點からも、學名の國際性の本質のためにも、また日本の分類學界の國際的信賴と期待とを傷つける點からも、まことに遺憾なものがあつてゐます。切角研究された業績が傷つく點から研究者自身にとつてもまことに惜しいことと思われまふ。

わが植物分類學會はこうした不利益、過失、障害を今後とも未然に防ぎたいと念じて、さきに昭和 23 年には學名發表について善處する申し合せを行い、昨 24 年にはこのことを具體的に進めるため 5 人の委員會(委員伊藤洋、小林義雄、前川文夫、原寛及び津山尙の諸氏)を設けて將來への對策と過去への取り扱いとの 2 點について研究を進め、はじめ